

(根底に横たわるもの)



やり込められてばかりいた親父に、三回だけ勝ったことがあります。親父は、僕の言ったことに対して、返答が出来ませんでした。

まず、小学校の時、親父が子供の僕らにだけ布団を上げさせて、自分はせずにお袋にあげさせているのを見て、どうしてお父さんはしなくていいの？と聞くと

「俺はそのためにお母さんを貰ったからだ」

と言うので、

「それじゃ、お母さんが可哀想だよ。お母さんが聞いたらどんな気持ちになるかな？」

と言ったとき。

次に、中学校の時、大陸で生まれた親父が、何か嫌な思い出でもあるのか、朝鮮のひとのことを悪く言うので、

「もし、お父さんが朝鮮のひとで、お父さんにはとっても才能があるのに、朝鮮のひとだからって認めて貰えなかったら、お父さんはどうするの？くやしくない？」

と言ったとき。

最後は、大学生の時、日曜日にもかかわらず、出社の折に、会社からお迎えの車が来たのに、親父が

「途中まで乗っていけ」というので同乗させてもらったのですが、その折、車内で

「会社というのは有り難いものだ。休日でも車を出してくれる」

と言うので、

「でも、運転手さんは、日曜なのにかり出されて休めないから、会社は有り難くないと思っているかもしれないよ、どう？運転手さん？」

と訊いたときです。

その後、あることがあって、機動隊に石を投げることになるかもしれない日の朝に、出かけようとする時、

「おまえは頭が悪くて、猪突猛進になると何も見えなくなる場所がある。しかし、正義感だけは認める。投げるなら、前じゃなくて、一番後ろから投げろ。見つからんようにな」

と言いました。

「大会社の役員が、そんなこと言っているの？まずいと思うよ」

と、照れ隠しに言って出かけました。

その後、親父は、正しいことを正しいと言い通して、奸計に合い、就任後、わずか一年で役員を退任することになったのですが、あるとき、ある会合で「男とは」を一言で言って話さなくてはいけなくなったのだが、今ひとつ是だというのがない。おまえ何かあるか？と聞かれたので、

「悲しいほどの一途さ」

とどこから振ってきたのか唐突に降りてきた言葉で答えると

「うん。そうか、そうか」

と嬉しそうに何度もうなずきながら、メモをしました。

更に後年、認知症を患った後で他界した親父の話が出た折、弟が、頭がぼけているにもかかわらず、突然その時僕が言った言葉を親父が呟いて「あれはいい、あれはそのものズバリだった」と言っていたと教えてくれました。

「東大を出なければ乞食になるんだぞ」と三年生の時に言われて以来、反発しか覚えなかった親父で、その反発があまりに大きくなりすぎたために、それ以外のことが、覆い隠されて見えなくなってしまっていたようなのですが、今、この歳になってやっと少し見えるようになりました。

親父が認知症になって一番始めに認知できなくなったのが僕でした。

「こころの中で、遠い人間ほど最初に忘れるらしい」と、入所している部屋の外で弟に言われてかなり傷ついたのでありますが、それからかなり年月を経た後で同じ弟から

「そういえば亡くなる数日前、なんか分からんが親父が兄貴のこと、あいつはいい奴だってぼつりとそう言っていたよ」と聞かされました。

思いもよらない言葉だったので大層意外な気がしましたが、その言葉を聞いた途端、こわばっていた気持ちが一気にほどけて、ああ、生きているうちに和解していればよかったなという思いが沸々とわき上がってきました。

親父もお袋も僕が長年にわたるうつ病から立ち直ったことを知らずにあの世に行きました。特に親父は僕に「自分は恨まれている」と思ったまま他界しました。「東大を出なければ」というたった一つの言葉にすべてを囚われて、それ以外のいいところをすべて否定して、全く気づきもせず、見ようとしなかった自分。

それを思うと、返す返すもつくづく申し訳ないことをしたとっております。

最後になりますが、一言言わせて頂けば、仕事の問題にせよ、自分の家族の問題にせよ、その根底には、自分と自分の親との関係が多かれ少なかれではありますが、やはり色濃く横たわっているような気がしてなりません。